

第四編 《教育座談会》

テーマ 学力向上のための新たな方策を考える

問題提起

21世紀に入り、「学力低下問題」が社会的議論の的となり、それまでの「ゆとり教育」がその原因として批判されるようになった。2002年には遠山文科相より、『確かな学力向上のための2002アピール「学びのすすめ」』が示され、「生きる力」の育成が提言された。「生きる力の知の側面」と言われる「確かな学力」を身に付けさせることを求められた。

そして、新学習指導要領が2003年より（小学校）実施された。新学習指導要領は、「生きる力」の育成という理念のもと、知識や技能の確実な習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視し、指導内容と授業時間の増加が特徴と言える。

その後、PISA2003、TIMSS2003の国際調査から、日本の児童生徒の学力低下が指摘された。また、2007年より全国学力・学習状況調査が実施された。都道府県別の順位が公表され、行政と学校現場にとって児童生徒の学力向上は喫緊の課題と言える。

学校現場からは「子ども達が勉強しなくなった」という声が聞かれる。生徒数の減少とともに、安房地方の高校入試では、合格点が下がってきたとの話もある。安房地方のすべての学校が学力向上に向けた取組を強化することはもとより、家庭・地域社会との連携も必要である。

このような現状を受け、安房地方の市町では、そのための対策がすでに行われ、成果を上げている。鴨川市では小中学生の通学合宿やゲストティーチャーの派遣、南房総市では土曜スクールや夏季講習の実施、館山市と鋸南町では教務主任会が中心となった小中学校が連携した学力向上の取組等である。また、各小中学校では、児童生徒の学力向上に向けた取組が行われ、成果を上げている。

安房教育研究所でも、児童生徒の学力や規範意識、自己肯定感に関わる研究を続けている。年度末には、研究成果に基づき、学力や規範意識、自己肯定感の向上に関わる提言をしている。また、平成22年度には「安房の子どもたちの学力向上を考える」、平成23年度には「学力向上のための、地域を挙げた取り組みを!!」と、児童生徒の学力向上をテーマにした教育座談会を行ってきた。

以上のことを踏まえ、本年度の教育座談会では、「学力向上のための新たな方策を考える」をテーマに設定した。学力向上の方策に対する討論を通して、より一層の児童生徒の学力向上に向けた取組への関係者の意識向上を図りたいと考えたからである。

最後に、この座談会が、安房地方の児童生徒の学力向上はもとより、安房教育と安房地域の一層の発展に寄与するものになることを強く期待したい。

パネリスト	南房総市教育委員会 主任管理主事兼学校教育係長	樋口 和夫 様
	株式会社Kamiko(神子学院)南房総エリア統括マネージャー	永田 司郎 様
	館山市教育委員会 教育委員	清本 智美 様
	鴨川市立小湊小学校 校長	石井 恵子 様

司 会 安房教育研究所 黒川 健二 調査研究部主事・川名 厚 教育研修部主事

形 式 ディベートの要素を加えたシンポジウムの形式

- ・2つの問題に、チームで立論し、討論する。初めに、出題された問題に4名のパネリストが意見を述べ、それらを踏まえ、チームA・Bそれぞれが出題に対して賛成・反対それぞれの立場で立論、主張する。さらに、再びパネリストから、それらの主張を踏まえて意見を述べる。最終的な結論を求めたり、勝敗を決めたりするのではないので、パネリスト・各チーム主張に対する討論はしない。

教育座談会（11／7）記録概要

主催者挨拶（速水所長）：本日は教育座談会として4名のパネリストにお集まりいただきました。4名のパネリストの方々はそのそれぞれの立場でご活躍の方であります。本日の教育座談会のテーマは、「学力向上のための新たな方策を考える」です。当研究所としては、今年まで3年間、学力向上をテーマにしてきました。今年度は新たな方策を考えるということから、座談会の形式も新たな形を考えました。本日の座談会が終わりましたら、学校に戻りましても、また地域においても本日の成果を還元できればと考えています。

出題1「学力向上のために、学力テスト等の学校順位の公表は必要か。」（菊岡）

2007年から始まった全国学力・学習状況調査は都道府県別の平均正答率が公表されています。また、いろいろな機関から順位が示されています。平均正答率や順位を公表することで、現状の絶対評価の曖昧さを補い、より質の高い授業を実践していくための教員の資料になるからという理由が挙げられています。教師は、児童生徒に学力が身に付くように教えるプロでなければなりません。指導の結果として平均正答率や順位が明らかになることは、教師の指導の改善につながり、指導力・授業力の向上と共に、指導意欲の向上になると聞きます。併せて、自分の子どもが通っている学校は近隣の学校と比べてどうであるか等、保護者にとって関心の高いことであり、知りたいと思うことは当然のことです。しかし、現時点では安房地方では全国学力・学習状況調査や千葉県標準学力検査などの学校順位を公表していません。

このような状況を考え、今後、学校順位の公表を求める声が大きくなることも考えられます。そこで、問題「学力向上のために、学力テスト等の学校順位の公表は必要か。」を皆さんで検討してください。

司会（黒川）：それでは、パネリストからご意見を伺います。

始めに、教育関係ではありますが、企業という立場になります、株式会社Kamiko（神子学院）南房総エリア統括マネージャー 永田 司郎様、次に行政の立場になります、南房総市教育委員会主任管理主事兼学校教育係長 樋口 和夫様、次に同じく行政の立場になります、館山市教育委員会教育委員 清本 智美様、4人目に学校現場の校長先生という立場になります、鴨川市立小湊

小学校 校長 石井 恵子様のご挨拶をお願いします。

永田：学習塾の先生ではありますが、このテーマをもった時、もし自分が学校の先生だったらどう考えるかを考えました。本音で言いますと、個人的には、学校順位の公表は嫌です。

なぜかという、表立って保護者の方から批判をいただくことになるだろうし、あるいは、教科ごとに受け持っている先生がいて、自分が受け持っている教科以外に低い教科があり、自分の受け持っている教科は比較的悪くないにもかかわらず、全体の評価が低いと、先生の教え方が悪いのではないかと批判される可能性もあります。保護者と接していく中で、この保護者は自分に「指導力がないと思っているかなあ」と考えながら生活していくのは非常に辛いと思います。

個人的には、自分が教師の立場ならば公開してくれなければ、それで済みます。しかし、公開されなくなった場合、先生方は結果を知って、「まずかったなあ」と反省はするとは思いますが、どれくらい強い意志を持ってその後の指導に取り組むか、わかりません。公表されるとなった場合、私が学校の先生だったらどうするかを考えました。嫌ですねえ、下のほうにいるのが。だから、死ぬ気で上のほうに行くように授業を改善すると思います。身に付くような授業をしよう、そしてきちんと点数が上がるような授業をしよう。ですから、1時間1時間の授業をすごく大切にして、一生懸命に授業をやろうと。意識は前者と比べて5倍10倍違うと思います。授業を受けた時に、子どもはどちらが幸せだろうかと考えました。前者の先生の授業の場合の方が幸せなのか、後者の先生の授業を受けた方が幸せなのか。やっぱり、一つでも多くの問題を解けるようにしてあげよう、なんとか身に付くような授業してあげようと思っっているような後者の先生の授業を受けた方が、子どもは幸せではないでしょうか。そこで私は賛成という意見を言わせてもらいました。

樋口：南房総市は学力向上を受けて様々な施策を行っています。後で紹介する機会がありましたら、紹介させていただきます。

このテーマであります学力テストと学校順位の公表について、結論から言いますと、「教職員と学校評議員に限って公表は必要である」と考えます。低い順位が出ましたら、教師として指導方法を変えたり、指導技術を向上させたりして、いろいろな努力をすると思います。やはり、それがないと我々プロの集団として

まずいのではないかと、子どもの学力を保障することが、まず、第一ではないかと考えます。

学校評議員に関して公表するということについてですが、学校評議員は各学校3名から5名いると思います。学校評議員は学校運営に対して意見を言う立場です。ですから、当然、守秘義務も生じますので、学校に対して意見を言う時には、学校にそれを知らせた上で意見を言っていただき、その後をつなげていただく必要があると思います。

実は10月21日のニュースで、大阪府の泉佐野市の市長が大阪府で行った学力テストの順位公表をしました。府で最下位の学校があったそうです。学校順位を公表したら、ホームページの閲覧が、初日が平日平均の1.4倍の1万4千件のアクセスだったそうです。ほとんどが学校順位を公表したページの閲覧だったそうです。地域の保護者の関心が非常に高いことが伺えます。

もちろん、私も教員をやっていますので、想像することができますが、公表したことによる永田先生がおっしゃったような学校批判や教師批判は当然出てくると思います。ただ先程、私が学校職員と学校評議員に限っての公表に関して必要であると言った中に、保護者に対する公表は入れませんでした。なぜかと言うと、今の段階で公表したら、果たして先生方がそこで変えられるかということです。踏ん張れるか、「あの学校のあの先生の授業はダメだよ、あの先生に教わったからだよ」と言われた時に、そこに耐える力があるかということ、まだ公表しないという理由がそこにあります。

安房の子どもが勉強しなくなったという事は、提案の中にあっただけだと思いますが、県北の子たちと比べて学力が、勉強の評価が低いと言われます。先生方が自分の指導技術を磨いて、自分の指導方法を改善しながら、子どもの意欲をどう高めていくか、その辺を絡めながら取り組んでいく必要があると思います。やはり子どもに対して学力を身に付けさせたいという願いは、どの教師にもあります。子どもには学力を身に付けさせたいと先生方全員が思っているわけです。「いや、俺は、勉強はいいや」と思っている子はもともといないはずですが。ただ何らかの理由で、途中で挫折していくのです。そんな中で、ホームページで平成21年度の高初中退の理由を見てみました。1割以上が、11.1%ですが、学業不振です。学業不適應を含めるとかなりの数字になってきますが、その辺、学業がうま

くいかなくてやめてしまうという子が1割以上いることを押さえていく必要もあるかと思えます。

3つ目として、子どもの位置を知る手立てが学校現場には無いということです。相対的な位置がわからず、平均点などが入っているとは言え、学校順位を知らせる事は教職員の指導意欲が当然上がってくると思えますし、研修等でプラスになるかと思えます。今、南房総市では、継続的な調査を行うことによって全国学力テストにおいて6年生の成績が中3でどのように変化してきたか、順位を比べた時に、低かった学校が元々低かったのであればこれはわかりませんが、最初、高かったのに下がってしまった、何が原因なのだろうか、何か問題があったのではないだろうかということを考えています。当然、学力に関して様々な要因がありますよね、学級経営であろうと色々な人間関係であろうと色々あるかと思いますが、その辺を探るような取り組みをしています。今年から市の一斉テストをはじめましたので、毎年データを累積し、それを検討していきたいと考えております。

最後に1点だけ、公表については保護者には公表しませんが、教員という立場で授業をやっていく時に、良い授業をしようという意識がすごく強いと思うのですが、学力を上げるという視点で考えると、良い授業が学力を上げる授業と必ずしも一致していないということがよくありませんか。我々には見える学力を上げるという責任があると思います。よくアカウントビリティ、説明責任が学校にはあると言われる。それにプラスして私は、結果としての責任もあると思います。学校には、ですから、教員として学力を保障することは命題でありますので、保護者もそこに期待しているということ、そして、もし自分が保護者で、自分の子どもの学力が低いという時に、それをそのまま流すことはできないので、私は公表して教員の意識を高め、授業改善に繋げてほしいと思います。

清本：子どもが2人おまして、館山二中と館山小学校でお世話になっています。私は学力テストの学校順位の公表は必要ないと考えています。理由を教育委員と保護者の立場で話させていただきます。

保護者として学校の順位を知りたいかと問われれば、もちろん知りたいと思います。でも、それは興味本位と言っていいと思います。ここでお話することになり、子どもの受けた学力テストの結果を見て参りました。一番関心があった事は子どもの点数と間違ったと

ころはどこなのかということで、県の平均点や全国の平均点にはあまり興味はありませんでした。一番知りたいと思った事は全国や千葉県レベルでの自分の置かれた順位のようなものです。これは学校内で行われている通常のテストでは分からないからです。将来、大学進学を希望していることもあり、もっと広い母集団において自分の子どもがどんな順位にあるのか、どのような位置にあるのかを知りたいと思いました。自分の知りたい情報に関しては、学校の順位の公表から見えてこないならば、学校の順位の公表は必要ないと思いました。

次に、教育委員として春に市内のすべての学校を訪問させて頂きました。そこで複雑な様々な事情を抱える生徒がたくさんいることを知りました。このような状況で、押しなべて平均化することに問題を感じます。また、学校によって児童数に大きな違いがあります。特に小さな学校で平均点を出すという事は、子どもの学力の実態を映し出していないように思います。平均点からみられる学校の順位は、弊害が出てくるのではないかと思います。学校のランク付けのようになってしまい、順位の低い学校に通う子どものやる気や自信をなくしてしまうのではないかと心配します。学力テストの学校順位は現場の先生がしっかりと受け止めて、今後の学習指導に役立てていただければ、十分だと思います。そこで、公表する必要はないと思います。

石井：学力向上のために学校順位の公表は必要かどうかと問われたならば、私は必要ないと考えています。

学力の捉え方については、さっき説明がいろいろありました。学校を含めた教育関係機関や家庭・地域によって、共通理解のレベルまで至っていない。そこに大きな課題というか、捉え方の課題というものがあると思います。本当に子どもの学力は低下しているのか、数字に表れたものが全てを表しているかと捉えていいのだろうか。文科省が今年実施した全国的な学力調査によると、日本の子どもの成績は決して悪くは無い、ただ、多くの課題が浮かび上がってきた事は事実である。暗記や計算は得意だけでも、判断力・表現力が身に付いていない。また、勉強は大事と思っているけれども、好きだとは思っていない。意欲の低下ですね。それから、授業以外に全く勉強していない。家庭学習の習慣などが身に付いていない。そして、学びを支える自然体験、社会体験、生活体験が不足して、人と関わる力が低下している。こういう学力の課題を克服するため

に、それぞれの学校が創意工夫した授業を行って、その思考力・判断力・表現力・意欲等を育てようとしている最中だと思います。そして、今後も全国的な学力調査を行って、継続的に検証していこうという考えが、現在の教育界の動向かだと思います。もちろん、教員が自分の指導を工夫改善するため、その客観的評価として学力調査の結果を真摯に受け止めることは当然のことだと思います。そして、私たち校長は、授業で子どもを育てる、そんな気概を持った職員集団を育てていく。そのような学校経営に努力することも言うまでもないことだと思っています。

このように学力低下の課題を捉えた上で、私が公表に反対する理由は、公表することによって懸念されることがいくつかあるということからです。先程述べた課題が改善されたかどうかということが、この学力調査の数字によって測れるものかどうか。特に学習意欲の高まりです。子ども1人1人の自己評価とか子どもを取り巻く大人の主観的評価によって、その学習意欲の高まりを評価しているのが現状だと思います。子どもの自己評価として、数値で表れるかもしれないけれども、それをもって本当に意欲が高まったとか、そのようにとらえていいのでしょうか。

また、学力を支える自然体験、社会体験、生活体験を豊かにするという使命も課せられている中で、私たちは創意工夫をして、一生懸命に取り組んでいるわけです。それらを通して育つ「人と関わる力」などが果たして調査によって測れるものなのでしょうか。学校には確かな学力だけではなく、言語活動と体験活動の充実を図りながら、豊かな心、健やかな体を育むことが含まれています。それは、これからの変化の激しい社会で、子ども一人一人が困難に立ち向かって未来を切りひらいていく力をつけることを学校に求められているのですね。そういうことを含めて様々なことを学校で努力しているのに、学校の順位を公表された時に、数字に表れ切れない学校現場の大事な取組が軽減されてしまうのではないかと懸念されます。

もう1つ、私にとっては欠かせない視点があります。それはインクルーシブ教育システムの構築を目指す特別支援教育の視点です。安房地区には通常学級に在籍する児童で発達障害のある児童、または指導上、先生方が困難を感じているという児童は約6%いる学校が56%あるということが、校長会のアンケートで明らか

かになっています。先程、清本さんもおっしゃっていましたが、私たちはこういう発達障害や学習障害で苦しんでいる子どもへの対応を図っていかなくてはなりません。その子どもを含めて、学力の向上を図ろうと日々努力しています。特別支援教育は健常児を含めたインクルーシブな教育であるという認識をもっともっと学校現場に根付かせていく必要があると、私は感じています。学校順位が公表されることで、その数値にとらわれて点数を上げるための授業になってしまうのではないかと、ということも懸念される大きな点です。

以上の点から学力向上のための学力テストなどの学校順位の公表について、必要ではないということを主張したいと思います。

司会（黒川）：4名のパネリストの皆さんからご意見をお伺いしました。結論的なことを振り返りますと、永田先生は賛成、樋口先生は教職員・学校評議員に限って賛成、清本さんからは、公表は必要ない、石井先生からは、公表は必要ないとのご意見をいただきました。パネリストの皆さんの意見を踏まえ、今度は各チームで主張してもらいます。（中略）それでは、Aチームは賛成の立場で主張してください。

Aチーム1人目：条件付きですけれども、学校関係者への公表に対して賛成します。現状で公表してしまうと保護者からの感情的な批判があるのでは、と言う話がありましたが、これは免れないと思います。これは学校にとって、今いろいろやっていることに対して、マイナスになってしまうのではないかと思います。学校の点数や平均点がわかれば、子どもの力を伸ばしたい、学力を伸ばしたいと学校は対策を講じます。そうする事はどの学校でも目に見えているので、そのことにより職員の指導力は上がる。子どもの意欲にもつながるといことでプラスになると思います。私は全国学力・学習状況調査が目に見えない学力も測っていると言いつつも、ペーパーで評価している以上、明らかに目に見える学力を測っていると、現状では言えるのではないかと思います。

Aチーム2人目：私も肯定ということで、こちらの資料に県の平均の順位が載っています。それを見たときに何も感じないかどうかと考えた時に、やはり感じると思います。「何を感じるか」というと、やはり1位の秋田県はどんな授業をしているのだろう、どんな対策をしているのだろうというよう疑問が湧いて、また、いろんなことを調べるということにつながっていくと

考えられます。そうした時に何も無い状態から考えるよりも、上位の学校は何をしているかということの研究したり、調査をしたりして、何も無いところから対策をする時間よりも、一つの例があって、「じゃあ、うちの学校ではこうした方がいいんじゃないか」と考えていくことで、効率化が図れます。そこで生まれた時間を、子どもに返すことができるということを考えた場合には、順位が公表されて、何かしら目標があって、それを使っていく方法があってもいいんじゃないかと考えます。また、樋口先生のお話の中で、大阪市でホームページの閲覧が非常に高まったと言う話があったんですが、保護者や地域の方に興味を持ってもらえると、学校と協調してやっていくことができるんじゃないかと思います。批判はその中にあるかもしれませんが、「学校はこうやっていきたい。お互いに同じような思いを持って、一緒に立場でやっていきましょう」という話を伝えられれば、協力を得やすくなる可能性がありますので、私は肯定の意見で話させていただきました。

Aチーム3人目：和田小学校は南房総市ですので、学力調査を行ないました。あまり大きな声では言えないのですが、自分が受け持っている学年はそれほど良い結果ではありませんでしたが、先程から数値の面で力を伸ばしたという自信はあります。周りの先生方に相談をしたり、落ち込んでいる人に声をかけたりして、普段から教材研究や授業力の向上といった事を教えてもらうようになりました。もちろんそれまでにもあったのですが、そういうことが増えるきっかけになったのかなと思います。先程、授業改善ということがあったのですが、自分の中でも意識が少し変わった気がします。ただ職員室の人間関係というか職場の雰囲気も大事な事だと思いますが、一つの良いきっかけになったと思っています。学校関係には公表するという点で肯定です。

司会（黒川）：次に、Bチームは反対の立場で主張してください。

Bチーム1人目：反対という立場で話をします。まず、先程からパネリストの方々からありましたように学力の捉え方が問題になってくるという点があります。点数だけを取らせるために教えているのではないし、そのテストで果たして将来必要となる力が測れるのかという点で心配になります。それだけではないと思います。やっぱり現場では、人間力というか、人を育てて

いくというように総合的に取り組んでいる。だから、高い点数を取って良い大学に進学したとしても、その人がその後どういう人生を歩んでいくかというのは、つまり人間力で、卒業した後もフラフラして仕事につかない人もいることから、この学力の捉え方、どういうところを鍛えているのかということを通理解できなければ、そういう批判の声になってしまうのではないかと思います。

Bチーム2人目：先程も石井先生から話がありましたように、学校にはいろいろな実態を抱えた子どもがいます。学校格差もありますし、いろいろな家庭環境を抱えた子どももいます。石井先生がおっしゃったように特別支援教育が必要な子どもがたくさんいます。そんな中で、学校としての平均化した順位で評価するのではなく、その子、個人個人においての体制とか成果とか、課題を一つ一つあげることによって、その子の学力面を把握し、意欲を高めて、さらにそれを学力向上につなげていくということを大切にしたいと考え、公表の必要はないと考えます。

Bチーム3人目：今回の学力検査は授業改善のために行ったという話がありました。すでに本校では自主的に研修をしています。公開研究会を行って、日頃の授業実践を見てもらうことで、授業の中での発問であったり、単元の計画であったり、そういうところをどう改善していったら、目の前の子どもが伸びていくのか、実際に授業を見ていただく中で、改善を行っています。学力テストも一つの参考資料とし、目の前の子どもの学力の向上を図っていくと考えることで、今回の公表は必要ないかと考えます。

Bチーム4人目：保護者に対しても公開したらということで、意見を述べさせていただきます。すでに都市部では行われているようですが、公表したことによって人気校・不人気校が公立の間でも出て、統廃合が進んでいるという話も聞きました。本来の目的であれば、授業改善により子どもの学力を向上させるという目的で公表するのですが、狙いからそれてしまい、教育格差が生まれてしまったのではないかと思います。すべての保護者、地域の皆さんに公表するというのは反対です。

Bチーム5人目：順位が出されてしまうと、おそらく保護者は学力を点数というところで見えてしまうのではないかと思います。そうなる、順位ばかり考えて、1位を良い学校と考えてしまうのではないかと思います。

す。点数で1位だからと言っても、必ずしも良い学校とは限りません。順位が多少低くても、その学校のいろいろな取組が良い結果を出して、子どもも育っているとも考えられますので、順位ばかりに振り回されるようであれば、公表すべきではないと思います。

司会(黒川)：再び、パネリストからご意見を伺います。A・Bチームの賛成・反対の立場での主張を踏まえ、主張に対する指摘やご自分の意見を再度述べてもらっても構いません。始めに、永田 司郎様、次に、樋口和夫様、次に、清本 智美様、最後に、石井 恵子様 の順でお願いします。

永田：いろいろな意見を聞かせていただき、私も本当にそうだなと思うこともありました。私は塾の先生をやっています。塾の先生は確かに目の前のテストの点数で良い点数をとらせることを目標しているのですが、それだけで子どもが世の中を生きていけるとは思いません、どの先生も。当然、人間力が必要だし、いくら勉強ができるからといたって意地悪な子だったら、そういう子は社会においてよくないことです。たまたま「どここの高校に行きたい、どここの大学に行きたい」ということにおける評価基準としてテストを受けるだけですので、それを子どもの夢を叶えるために、点数を向上させるためにやっている生業なわけです。ですから、私どもは決して点数だけ良ければいいとは思っていません。勉強は苦手だけど、人が困っているといつでも優しく声をかけてあげられる、私はそれだけでも立派に世の中を生きていけると思うのです。

ですから、学力テストを公表したことによってそういう方向に持っていきたい訳ではなくて、学力テストは学力テストとして、テストでどれぐらいの点数がとれるのか、目に見える学力ですね、そういったものの評価の基準の一つとして活用すればよいと思います。実際には保護者の方々から感情的に批判がいっぱい出るかと思います。学校の先生方や塾の先生、私たちもそうですが、結果が良ければいいというわけではないですよ。それにもいろいろ評価することがたくさんあるということ、先生方からもきちんとお話ししていただければ、分かっていたこともたくさんあると思います。

先程からお話に出てきましたけれども、秋田県がなぜ1番なのか気になるかと思います。こういうプラスの点も出てくるのです。どうして1番がとれるのか、

ちょっと授業を見てみたい、あるいは実際に、自分の学級学年の評価が低かったの、他の先生に相談してみるとおっしゃっていた方もいます。学習塾は基本的に評価が出る社会なので、授業のうまい先生の授業をDVDでストックしています。少しでもいい授業の先生を見られるようにしたり、あるいは研修をかなりやったりして、そういう環境を作っています。先程、2人の先生から意識が高まるということが出てきましたので、そういう良い面もあるかと思いました。

樋口：まず、学校教育には学力向上以外にも大切なことがもちろんあります。ただ、そうやって言うのと逃げている部分があるのではないかと、我々は全人的な教育にも携わっているわけですが、しかし、学力を高めるという事は学校が1番求められていることではないかという押さえをしておかねばならない。テストだけで評価できるものではないという考え方、確かにあります。ただ、逆にテストでも評価できるものもあるはずです。テストだけで評価できないというのは一つの逃げのように思います。

その中で、南房総市においては、学力向上に向けていろいろな施策をしていましたが、従来のように学習指導そのものだけを対象にするのではなく、よく「知・徳・体」といいますが、本市では「知・情・意」と表現しています。知は知識技能、基本的にそれはわかりますよね。ピラミッド型として考えてください、一番上が知識技能、その下が「情」なんです、これは感性・誠実さ・品格とか責任感など含めて「情」と言うようにしています。1番下の土台になるのが「意」です。これは、意志、例えば我慢強さとか忍耐力だとか根気強さですね。すなわち学力を支えるものは、色々な強い意志であったり、素直さであったりとか、いろいろな物に支えられながら初めて学力は伸びるのです。ですから、我々は学力にだけ特化して話していないということを理解していただきたい。学力テストだけですべてを評価できないという意見はわかりますから、もう一度言いますが、学力テストでも評価できることも理解していただきたい。

清本：私はここで初めて「見えない学力」という言葉を聞いたのですが、保護者としては学校に求めているのは見える学力、要は点数を上げて欲しい事です。見えない学力って、今、伺っていると家庭ですることなのではないかと思いました。

石井：いつも、いつも思うのですが、学力が低いこと

を公表して、対策を取りますよね。その対策が大事だと思います。Aチームの話の中に、対策をとると職員の指導力が上がるということがあったのですが、その対策って何なのでしょう。先程から授業改善という声も出ていますが、「授業改善はやってます」と言いたいところですが、もしかしたらやってない人もいるかもしれないと思うから、堂々と言えない気持ちもちょっとあります。先生方は、日々授業改善に取り組んで、奮闘していると思います。

先日、館山小学校の公開研究会に伺いました。算数の授業をいくつか見せていただき、分科会にも参加させていただきました。そこで、自分の学校はやっていっていると思っていたが、館山小学校はもっとやっていると思いました。そして、まだまだできると思いました。提言の中にあつた南房総市の土曜スクールや鴨川市がやっている漢字検定は、残念ながらここで議論している授業改善の授業ではないと思います。そういうものは時間的に大変かもしれませんが、やろうと思えばやることができます。そして、もしかしたら、目に見える学力という意味では数値が上がっていくものなのかもしれません。鴨川も取り組んで数ヶ月で、この度、やっと検定に至りました。検定の結果、学力が向上したという成果がでるかどうかわかりませんが、やってみる価値はあると思います。

公表がいいかどうかということですが、教員も「このままじゃいけない、子どものためにもっと何かやってあげなくちゃ」そう思うことが、当然だと思っています。だから、公表すれば職員の指導力が上がるのではなく、学力を向上させるために何をどうするかということ、一人一人がもっと明確に考えなくてはならないと思います。館山小学校の研究を見せてもらって、このままでは学校の危機だと自覚して、一丸となって取り組んでいくような姿勢が大事であると思いました。

また、永田先生がおっしゃっていた「良い授業を見る」ということに、私は非常に興味があります。私たちの研修の場合、学校で行う研修がほとんどです。公開研究会も学校です。ぜひ、塾の先生方と合同の研修会をやってみたいですね。お互いの授業を参観し合うなどして、お互いに得るものがあつたら絶対に子どものためになると、お話を聞いていて思いました。

それから、清本さんがおっしゃっていた「家庭でやることではないですか」ということですが、残念ながら今の家庭は、公表した結果の捉え方がバラバラだと

思います。清本さんのように前向きに捉えてくださる家庭もありますが、「何これ、やっぱりあの先生、だめだよね」と捉える家庭の方が多いかもしれません。それに対して、学校が「これこれ、こういうふうに取り組んでいく」と伝えても、「この数字、見てもらいなさい」と言われたら、どのように対応したらいいか難しいと思っています。私は校長ですから、それでも先生方がやる気を失わずに前向きに取り組んでいけるようにするには、どうしたらいいのだろうと悩みます。

実は昨日、学校の危機管理についての研修会がありました。その中で保護者への対応というのは、慎重に誠意をもって丁寧にしないと、子どもにとってとんでもないことになるということを勉強しました。今、保護者に順位を公表してしまったらどんなことが起こるのか、自分でもちょっと想定しかねます。

司会（黒川）：4人のパネリストの方々から、会場の皆さんからご意見をいただきました。ありがとうございました。

司会（川名）：司会は代わりまして、教育研修部主事の川名です。それでは、問題2に移ります。

出題2「学力向上のために、学校の土曜日授業は必要か。」（菊間）

東京都を始め、多くの地方自治体で土曜日授業の実施を決定したり、検討したりしています。土曜日授業を実施した学校の保護者には好評を得ている場合もあります。中には、「今のままでは休み過ぎ」「平日が過密している分、いいのでは」「塾やスポーツ少年団にも影響はない」等の声もあります。一方、学校現場では「指導時数確保のためにもよい」や「教師の負担が増える」等賛否両論が挙げられています。安房地域には、南房総市の土曜スクールがすでに実施されています。

このような状況を考え、今後、土曜日授業の実施を求める声が大きくなることも考えられます。そこで、問題「学力向上のために、学校の土曜日授業は必要か。」を皆さんで検討してください。

司会（川名）：パネリストからご意見を伺います。始めに、行政の立場になります。館山市教育委員会教育委員 清本 智美様、次に、教育関係ではありますが、企業という立場になります。株式会社 Kamiko(神子学院)南房総エリア統括マネージャー 永田 司郎様、次に、行政の立場になります。南房総市教育委員会主任管理主事兼学校教育係長 樋口 和夫様、4人目は、学校現場

の校長先生という立場になります。鴨川市立小湊小学校 校長 石井 恵子様のご挨拶をお願いします。

清本：保護者の立場から申し上げたいと思います。私は小学校から大学まで国立公立の学校に通っていました。土曜日は普通に授業がありました。土曜日に学校に行くことに対してあまり抵抗がないので、学校の土曜日授業をやっていただきたいと思っています。特に中学校でその必要性を感じています。理由は2つあります。

1つは学力向上のためです。学力の低下の1つには、学習時間が絶対的に足りないということを考えております。娘の通う中学校では成績の二極化が進んでおります。折に触れ、学年便りや学級懇談会でとても危機的な状況であると先生方はおっしゃっているのですが、具体的な対策は何もなされていません。なぜ補習をやらぬのだろうかと感じております。中学校に関して言えば、ほとんどの子が土曜日の部活動に参加していると思われまふ。その時に先生もいらっしゃっていると聞いているので、先生方のご負担が大きくなるのであれば、部活ではなく授業をやって頂けないのでしょうか。成績の二極化の解消のために習熟度別の授業が効果的であると聞いていますが、規模の大きな中学校ではそれは難しいと伺っています。土曜日にそれを補習と言う形で実現することができないのでしょうか。

2つ目です。授業の遅れをなくしてほしいのです。授業時数が足りなくて遅れていると思っているのですが、授業の進みが遅くて、「最後の単元、あっという間に終わってしまったよ」と子どもが話しています。子どもの宿題を見ていて、年末にもなって上の教科書をやっていることにとっても驚きました。案の定、教科書は全然終わりませんでした。さらに終わらなかった単元が次の学年に持ち越されたこともありました。そのようなことがないように決められたペースで単元を進めてほしいと思っています。土曜日に授業を行えば、少しでも余裕を持って進めていただけないかと思ひます。さらに、教科書の内容が増えていくということですが、それに対応して授業の時数が増えないということで、全てこなせるのかと心配しています。また、インフルエンザが流行った時も何度も学級閉鎖になってしまい、授業がなくなったり、大震災の後も1週間ほど早く終業式となったりしました。不測の事態で授業がなくなってしまうということを考慮して、授業を進めていただきたいと思ひます。学力向上

のため、余裕のある授業のため、土曜日の授業をやって頂きたいと思います。

永田：私、今38歳ですけども、私が小学校・中学校・高校の時にはご存知の通り、土曜日の授業はありました。はっきり言いまして、楽しかったです。学校に行くのが楽しかったです。ですから、学力向上を抜きとしても、学校に行けば友達がいる、先生がいる、そこにコミュニティーがあるという意味で、やって欲しいと思います。

それからもう一つ、学力の低下がひどいと思います。それは、私が学習塾で、子どもと接して感じることでですけども、例えば、具体的な名前を出しますが、安房高校の生徒ですが、「 $(2a + 4b) / 2$ 」の前の「2」だけ約分して「 $a + 4b$ 」と答える子が結構います、安房高で。「1000円の2割はいくら」と聞くと、「先生ちょっと待ってね」と言って、200円とすぐに出てきません。もうこれは学力低下の何ものでもないと思われまます。やっぱり、学力の低下を「ヤバイよ、ヤバイよ」とおっしゃっているのです、高校の先生方が。だったら教えてあげなきゃいけないじゃないかと、僕は思っています。塾でもそうなのですが、今までなら70分で教えられていたことが、式の変形を丁寧にやらないと「先生、なんでこんなになるの」と言う生徒が多いのです。すると今までの時間で終わらなくなってくるが多くなってきています。辛いですけども、生徒に理解させるために「じゃ、いついつ来れるかい？」と自分の休みを返上して補習で呼び出すということをやっています。やっぱり目の前に学力の低下という現状が起きている以上、やっぱり時間を作ってあげなくてはいけないと思います。

それから基本的なことをできない子が多くなってきました。丸付けの仕方とか宿題のやり方とか、家での勉強の仕方ですね。やっぱり丁寧に教えてあげなくてはいけないと考えると、時間がかかることだと思いますので、先生方の負担は本当に大変かと思えますけれども、勤務時間には指導してもらいたいと思いました。

樋口：まず、結論を言う前に、先程、南房総市の土曜スクールが紹介されましたので説明します。目的としては、都会と違って学習機会の少ない子どもに学習の機会を与え、児童生徒の学習意欲の喚起だとか学力の向上を図っていく。保護者が中心となって学習環境を整備しています。ですから、学校の教職員がそこに入っているということは基本的にはありません。ただ場

所を確保するために、公民館が使えないから学校を使いたいという場合がありますので、その場合は学校を使います。これは希望制ですので、今年度は小学校12校中3校が実施し、当該学年の児童の、希望者ですから、32%が来ている。残りの9校のうち6校が、今、PTAで検討しているところです。また、中学校では7校中6校が実施しており、該当学年の14%の参加です。もちろん強制ではありませんし、経費も受益者負担ですので、そのような形になっています。

その前提の上で「必要ない」と私は結論づけます。

なぜならば、今、南房総市でも企業と先進的にやっっているながら、必要ないというのは非常に矛盾しているのですが、今、教師はとて多忙だと言われています。先生方には土日にはできるだけ休養してもらって活力を回復してもらいたい。今、精神的なものも含めて、仕事量の増加もあるのかもしれませんが、療養休暇を取っている先生が非常に増えてきていると聞きますと、私は教職員のためにも、労働基準法で定められてもいますし、土曜日は休日の方がいいと思います。子どもにとっても、塾や部活動も含めて大変疲れ気味の子どもの様子が伺えます。特に中学校。朝練をやって、土曜日に練習して、日曜日に試合となりますと、1日休みはない。当然そこには教員も加わっているわけです。この中で、やっぱり子どもの土曜日の休養も必要ではないかと。今、すでに土曜日の休みが定着した中で、その時にスポーツの少年団に入ったり、地域の行事に参加したりして、また勉強する子も塾にも行く子もいるかと思えます。今の段階で、職員の負担、子どもの負担を考えると、土曜日の授業は必要ないと考えております。

石井：使い方によっては、土曜日授業はあってもいいと考えています。それは、清本さんからあった補習という考え方です。

うちの学校でも、土曜日ではありませんが、夏休みに入ってから数日間、補習をしております。他の学校でもやっているところがあるのではないのでしょうか。ただ、補習の対象を決めるにも非常に配慮を要します。補習に来るということは、「あそこの子は勉強できないから学校に行くんだって」と近所から言われる可能性があります。だけど、最低限の学力は付けてあげたい。そうかといって、みんなが来てしまっただけでは成果が上がらないわけです。どうしたかという、各学年の課題を提示してできなかったら補習しますよというこ

とを、それぞれの家庭へ伝えました。そうしたところ、「やってくれてありがたい」といって何も見てくれない家庭もあれば、それを示すことによって、少し協力するという家庭も出てきました。結果的に補習をしまったので、そのような考えの下に土曜日を使っていくことも全く否定できないと思います。土曜日を使って補習をすれば、先生たちの負担は確かに増えると思います。でも、先生方は子どもが好きで先生になったんですよ。まして、今、教えている子どもが可愛いはずです。ですから、反対に「校長先生、補習をやってはいけませんか」と言ってくる先生も現実にはいます。その中で、「いいよ」とすぐに言えないのが今の教育界の現状だと思います。なぜ言えないかという、「あの先生だけ、あの学年だけどうしてやるんですか」ということになるからです。個人的にやるわけにもいきませんし、なかなか難しいことだと思います。ただ、補習という考えは学力向上に結びつくと考えられます。

また、土曜スクールのお話が出ています。土曜スクールの取組がどれだけの成果があるか分からないのですが、土曜スクールの指導者に地域の方だけでなく保護者もなっている地域があるということを知っていますので、地域や家庭がようやく協力して、教育に力を発揮してくれる時になってきていると思います。学校に期待されている教育がいろいろあって、先生たちの負担は大きいと思います。土曜スクールのように地域の教育力みたいなものが、大きく膨らみつつあるという事はとてもいいことだと思います。子どもに学力を付けていくには、学校だけではなく「家庭の協力」が無くてはならないと思います。それを得るのがどれだけ大変なのか、現場は苦労していますね。いろいろな家庭環境から子どもは学校に通ってきていますから。本校では家庭学習カードの取組をやっています。強化期間を決めて保護者にチェックをしてもらったり、一言書いていただいたり、子どもを励ましてもらったり、そのための呼びかけもすでにやっています。小湊小学校はわずか88人ですが、それでも全家庭が協力してくれるのはなかなか難しいのです。ですから、土曜スクールに期待したいというところです。今までのような土曜日の授業の復活は、自分としては否定と考えます。

もう1つあります。先生たちの教材研究の時間を見ていると、家に持ち帰ってやってくるということが、かなり多いと思います。学校にいられる時間は限られていますので、週案を見れば、どれだけ準備をしてそ

の授業に臨んでいるかということがわかります。そう考えると土曜日は、先生方にとって子どものために考えを巡らせたり、教材を作ったり、実際に調べに行ったりする貴重な時間という実態もあると思います。

ですから、補習の考えだったらよいということと、地域・家庭の教育力を上げるということに土曜日を使っていきたいということ、現在、土曜日に授業はなくても授業改善のために使っている先生もいるということを考え合わせ、総合的には否定的な立場をとらせていただきました。

司会(川名)：賛成2名、反対2名のご意見をいただきました。このご意見を踏まえ、各チームで賛成・反対の立場でどんな主張をするのか、相談してください。Aチームは反対側、Bチームは肯定側の立場になります。

Bチーム1人目：新しい学習指導要領になって指導内容が増えてきているというのは現実で、それを確実に消化したり、子どもにわからせたりするのも教師の役割の一つだと思います。そういったことを考えると、学習内容が増えたんだったら、その時間分だけの時間数を確保する必要があるのではないかと思います。土曜の学校というのは必然的に必要になってくる。先程の話の中で、インフルエンザで学校が休みになったとか、そういったことがある事も事実だし、そういった中で時間を確保するというのも大切なことだと思います。

また、学習内容が増えてくる中で、それは学力向上と少しは関わりがあると思うんですが、いろいろな子どもの行事というのも減ってきているのも事実です。行事の中でいろいろな企画力を養ったりとか表現力を養ったりすることも、学力向上の1つに挙げられるのではないかと思います。なので、子どもが自分達で企画する機会というのを持つためにも、土曜日に時間が必要になってくると考えました。

Bチーム2人目：私の学校では先週から5・6年生の希望者を対象に放課後スクールというのを始めて、木曜日の放課後を使って希望したお子さん達がお勉強することを始めました。正直、子どもの普段の様子を見ていて、帰ったら遊びたいと言っている子が多かったり、習い事などが多かったりして、そんなに集まらないだろうと思っていたんですが、自分が持っているほとんどの6年生が希望して、8割ぐらい参加しました。翌日に子どもに「どうだった」と聞いたら、「すごく良かった」と答えが返ってきたのです。「わかってよ

かったなあ」と思う反面、自分としては、外部の塾の先生に教えてもらって分かったというのは「ちょっと切ないなあ」と感じてしまいました。ならば、自分たちの手で授業をやって、わからせてあげるというの必要なのではないかと思いました。

それから、子どもも保護者も学力向上のために時間を作ってほしいと希望している事が分かったので、土曜日の授業は必要だと思いました。

Bチーム3人目：本校では、土曜スクールをすでにやっております、学校の職員ではなく退職された校長先生を始め、退職された先生方を中心にやっています。内容としては、ドリルの学習など基本的な反復練習ということで、これも希望制なので、実際に人数を募ったところ、かなり多くの子どもが集まりまして、子どもというか保護者のニーズを感じました。そういった関係で、1年生から3年生までで、4年生から6年生は我慢してもらおうということでやっています。職員ではないので補習ということはできていないと思いますが、学校外の方が、元教員ではありますが、また関わるということで、子どもの様子をいろいろな角度から捉えることもできますので、みんなで取り組んでいくということで、地域ぐるみで関わっていくという点ではとてもいいのではないかと考えます。

Bチーム4人目：先程、永田先生が話されたように学校が楽しく、土曜日にも遊びに来るので、学校で遊んで楽しい経験をたくさんさせてあげるといのも、すごくいいと思います。今、子どもは一緒に遊ぶということをしなくなった。遊びが変わってきた。そういうところで、遊びの楽しさやいろいろな楽しさを、勉強だけじゃなくて、樋口先生がおっしゃったような教育の下を支えるような経験をさせていくという手もあるから、以前、土曜日に楽しい活動があったと思うので、是非やってみたらどうかと思いました。

Bチーム5人目：中学校の立場から述べさせてもらいます。清本さんから部活のやり過ぎという話が出ていますが、

我々中学校の教員からしますと、土曜日・日曜日と常に部活が入っております。極端な話、土曜日に学校に行くと、ほぼ全員の先生に会うことができます。それだけ部活は、学校にとって重要であり、先生方は、土曜日は学校が休みという概念を持っておりません。

では、例えば午前中に勉強して、午後を部活にしてはどうかというのは、私は受け入れられます。負担感

を減らしていただきたいという考えもあるのですが、現在の先生方の実態を考えれば、部活に出たいと思う気持ちがあるので、それを授業に変えるというのは、さほど問題がないという気がします。

また、部活をやっていると、どうしても勝利至上主義というのが出てきてしまっていて、部活で勝っている先生がいい先生だと評価される部分があります。先程の話ではないのですが、学校は本来、結果だけが全てではないので、過程というのも大事ですし、人間を育てるという面を考えると、部活だけにこだわっているのはどうかと考えます。この機にそういう所にも目を向けられたらいいと考えます。

司会（川名）：次に、否定側Aチームの主張です。

Aチーム1人目：学校の土曜日授業に対して、否定的な立場で話させていただきたいと思います。現在、土曜スクールなど、地域が中心となって補習などを行い、成果が出てきているということなので、私はこちらの方に力を入れたらいいのではないかと考えます。

学校が仮に土曜日授業を開いた場合に、補習という形はとれないと思います。学校はやっぱり公的なものなので、平等に子どもに全部に呼びかけなければならない。とすると、私たちが思っている個別に対応する補習という形はできなくなるので、私は学校の土曜日授業については否定です。

Aチーム2人目：土曜日授業には否定的です。小学生に限って言えば、家庭で過ごすという目的を果たして欲しいです。先程、月曜日から金曜日だけでは消化しきれないことがあるとありましたが、それは月曜日から金曜日の間にしっかり終わらせて、土日を迎えるというようなケジメと言うか、しっかりとした時間のメリハリをつけた方がいいと思います。

それから、土曜日と日曜日の休みは長い時間があるので、自主的に家庭学習ができるといいと思います。一斉に授業を受けた方がわかりやすいと言う子どももいれば、自分一人で勉強した方がより分かるという子どももいると思いますので、家庭学習の機会として土日を使わせたいと思います。

また、家庭でどのように時間を使っているか気になります。携帯電話を長い時間を使っていると思うんですが、一度そういうことも調査し、土曜日の過ごし方というのを、もう一回保護者をお願いをして、もう少し有意義に使ってほしいと訴える必要もあるかと思えます。

Aチーム3人目：土日は毎週のように剣道の大会に参加しております。土曜日に授業と言うことで話が挙がっておりますが、先程、清本さんからあったように、確かに各教科担任の先生方が考えていかなければならないことが多数あるかと思っています。

この日本ではスポーツに関しても活性化してかなければならないということがありまして、その根本的なものが中学校の部活動だと思います。平日ですと、あまり練習できないということがありまして、それを土曜日・日曜日に練習していきたいという部分もありますので、そういう時間に使っていければと思っています。

また、スポーツに限らず、自分のクラスの生活ノートを見てみますと、普段は勉強している子なんですけれども、長い時間を使ってバイオリンの稽古をしたということを書いている子もいます。やはり平日ですと、学校から帰って、塾や勉強に追われて、好きなことや楽器類などに対しても時間を使えない部分があって、土日を使ってそういうことをする時間に使っていければと思います。

普段、剣道を中心に指導しておりますけれども、「土曜日・日曜日に部活があるから勉強できなかった」とか「テストの成績が悪かった」という事を口にするものではないと話しております。土日の稽古があるからではなくて、普段の時間の部分でしっかりと勉強していれば、土日もしっかりと勉強することができると思います。

Aチーム4人目：部活の終わった3年生は気が抜けたりとか、授業に対しても集中できなかつたりとかすることが発生します。部活がある日にメリハリをつけていくということも中学校にはあると思います。

土曜日が半日ではなくなったのは10年以上も前で、私の教科は美術なんですけども、一番割を食うのは実技教科だと思っているんです。美術・音楽・家庭科とみんなそうなんですけども、どれも時間も減らされました。

なぜ、土曜日を休日にしたかという、覚えている限りでは、外に出ていろいろなものを吸収するというのが第一だったと記憶しています。まずやってほしい事は、その削られた部分を使って、自然に親しんで、自然の摂理を考えるなどして欲しいということがあると思っています。そこから、実体験があって、実際の授業の中で、「あっ、そうやって自分が観察してきた

ことがそういう理論に基づくんだ」とか、そういう所に帰ってくる部分も多分にあると思います。ただ授業時間を増やせば学力が上がるのではなく、いかに実体験を吸収させて授業にリンクさせていくかという点を考えた時に、ただ授業時数を増やせばいいというものではないと思っています。そう考えると、授業時間を先に作った方がいいかどうかということを、私は否定的に捉えています。

Aチーム5人目：樋口先生の話にもありましたが、子どもは疲れています。学校の授業が終わった後に、習い事とかそういったことで、もちろんそれは自分が希望したことではあるのですが、やはり、朝、子どもを見ると疲れが残っているという気がします。和田小学校は毎週月火水の朝、100マス計算をします。極端に落ちるわけではないのですが、月曜日は何回目でも結果が悪いのです。もちろん、土日で遊びすぎて疲れてしまったと言うのですけれども、子どもにも、たまには休養が必要と思います。そのためにも、土曜日は学校に行かないということも必要と思います。もちろん我々教師も、土日に学校に行って仕事をするということもあるかと思っています。そういった仕事をするための時間も必要だと思います。

司会（川名）：お互いの主張に対してもう一度意見を言います。互いの主張に対する意見を、肯定側のBチームからお願いします。

Bチーム1人目：Aチームに反論します。先程、月曜日から金曜日はしっかり勉強して、土曜日は休むということでメリハリをつけたらいいのではないかという意見がありましたが、今、現在、平日が苦しい状態です。1年生でも6時間目までであるという日も、今、できています。ゆとりのない生活を毎日するのではなく、それだったら土曜日学校に来る日にして、平日にもう少しゆとりを持った中で授業を行っていく方がいいのではないかと思います。

Bチーム2人目：先程、子どもにも休養が必要とありましたが、子どもには休養は必要ありません。例えば、土曜日の朝10時位まで寝ていました。寝ているなら学校に来なさい。何か一つでも経験させてあげたり、物事がわかるようになったりしたら、とても良いと思います。その分、平日に余裕が出来てくるので、土曜日の午前中ぐらいもっとガーッとやったらいいと思います。

Bチーム3人目：先程、土日は家庭学習をしっかりや

る良い機会ではないかという意見がありました。そこに対して疑問を感じました。家庭で、丸付けや勉強の仕方がわからない子が、現状としてあるのではないかと思います。その部分を土曜日の午前中だけでも活用して、学び方を教える良い機会なのではないかと思うので、土曜日の授業が必要だと思います。

Bチーム4人目：土・日はいろいろな場所に出かけて、いろいろものを見てほしいという意見がありました。果たして、土日にそういうところに行っていい体験ができるのかということ、疑問に感じます。いろいろな体験ができていないので、体験不足・経験不足ということが問題となっていて、新しい学習指導要領にも体験学習の重視とすることが謳われています。結論から言いますと、今は体験や経験させる事を学校が中心となってやる時代なのかなあとと思います。

私は理科を担当していますが、理科と言う教科の性質を考えましても、体験、経験、探求といったものをたいへん大事にしています。学力向上のそういった面から言えば、ドリル学習のような反復練習のようなものです。そういうものに力を入れていった方が、もしかしたらテストの成績は上がるのかもしれませんが。

しかし、そういうものでは理科の本当の楽しさは教えられないと思います。ですから、地区の色々な地層を見に行き、野外実習をしたり、あるいは調べ学習をして、みんなで発表しあったりして、近くの安房高の化学部にも来てもらったことがあるんですが、そういう外部の講師を呼んだりして、楽しい実験を経験したり、テストの成績が上がるというだけでない、何かそれは省くことができないものなのではないだろうかと考えます。

そういうものを充実させていくと、今度は知識を定着させる時間が少なくなりますので、土曜日に時間があれば、時間を十分取れるとは言いませんが、少し余裕が出てくるのと考えます。つまり、学校で体験学習を大事にしたい、そうなる時間が足りないの、土曜日の授業があるとゆとりが出てくるのと考えます。

司会（川名）：それではAチームお願いします。

Aチーム1人目：土日の使い方ということで、Aチームは土曜日の授業は否定の立場で意見を述べさせていただきます。

先程、学習内容が増えたので、土曜日にということがありましたが、やはり、時数は総合的な学習が減りましたので、逆に、子どもからすると国語・算数はし

っかりやっている部分もありますので、やはりそういう部分では、土日に体験的な部分を、子どもの興味関心に合わせてできればと感じます。

そうは言っても、西条小学校さんでは、地域の方で土曜スクールなどをやっているそうなので、土日に勉強しなくてもよいというわけではありません。安房の地域は、地域の方が子どもを良くしようとするのでは、一生懸命な地域ではないかと思えます。子ども会の行事や社会体育などが活発になっている地域もありますので、地域で子どもを育てるといって、学力に関しても協力体制が取れるのではないかと感じています。私たちが授業をするだけではなく、地域の方や家庭と連携してやりたいと考えています。鴨川市は、小中一貫教育の中で家庭学習の手引きというものをしています。そういう部分でも、家庭との連携を取りながら、土日を活用していきたいと感じています。

もし、土曜日授業をやるのであれば、今の教職員のシステムでは厳しいと感じます。時間割とか、教職員の数などを変えない限りは、やはり授業を土曜日にやるというのは厳しいのではないかと思います。私も教材研究をするのに土日を目標に、その日を目指して考えていますので、多くの先生方も土日を目標に頑張っているのだと思いますので、その時間は有意義に使いたいということで、土日に授業するというのは否定的に考えたいと思います。

Aチーム2人目：今回は、「学力向上のために、教職員が」という条件がわからないのですが、学校の土曜日授業が必要かということについて、否定ということで述べさせていただきます。

先程、Bチームの方から肯定意見が全般的に出ましたけれども、本当に可能でしょうか。そこを聞きたいと思います。そもそも教員を取り巻く様々な枠が変わらない限り、これは可能ではないと考えます。

実際、私も土曜日が4時間あったころから教員をやっておりますが、途中、隔週土曜日が休みになり、徐々に変化してきました。それを実際に体験していますけれども、はっきり言って、多忙感は増しているような気がします。もし、土曜日授業となれば、現状のままであれば、教職員では無理と考えられます。

先程、樋口先生がおっしゃられていましたが、教職員の多忙化、メンタルヘルスに関する事、様々な面も管理職の先生方も大変よく考えていただいています。先日、職員会議でもその多忙化を解消するような議題

が出ました。校長先生から様々な案を出していただき、例えば、ノー部活デーを作らないか、ノー残業デーを作らないかとか、出勤退勤をしっかりと管理しようとか、いろいろ出していただきましたけれども、その辺の部分が現状を維持しようとするのが大変難しいということです。ワークライフバランスを考えても、現状のまま何とかしようというのは難しいことではないかと考えます。学力向上と言う面を考えれば、土曜日授業を全否定するというのは難しいかもしれませんが、条件付きで否定いたします。

Aチーム3人目：授業時数の確保、それから学習内容の完全実施ということが非常に難しい。これは立場として言っています。

先日、自分も学習指導要領を読み直してみました。自分の専門である体育を見て、「これってそうだったの」ということが実はあったんです。本当に、今回の学習指導要領の改訂を、学校がどこまで熟知しているのか、本当に教えなくてはならない事をきちんと教えているのだろうか、そこのところが一番の問題だと思います。それがきちんとなされているならば、先程あったような1時間の授業に3時間も使って、授業が12月を過ぎても、上の教科書が終わらないという状況というのは避けられたと思います。

そのようなきちんとした目で見ると、時数をどう確保するか、各校の教務の先生を中心として、校長先生、教頭先生の腕の見せ所だと思いますが、やはり時数をどうやってとっていくか、だいぶ柔軟になってきましたが、1週間のうち、帯でとって行ってこれを1時間としてカウントして、ドリル学習のようなものとか、そういったもののように工夫して行ってカバーしているものがあると思います。

2つ目として、ゆとりということが出てきたのですが、自分も土曜日があったところから教員をしていましたが、土曜日があるということはゆとりがあるように思えるんですが、授業時数が増えるということは、それだけ教材研究の時間が必要になります。土曜日が半日で終わっても、9割ぐらいの方はお弁当を食べてから帰ります。なぜならば、教材研究をするためです。そうすると帰りが3時、4時になっていく。ゆとりが本当にできて、教師がゆとりを持って、子どもにとっていい授業ができるのかということ、それもちよっと無理だろうと思います。

その他に、この資料にもあるように東京都では、教

師のサービスをどうしているのかということ、講師を大量に入れて、金曜日の5・6時間目を講師、講師でつないで、教員はそこを休みにして、その人が土曜日授業していくという対応か、もしくは、長期休み近くになると土曜勤務にして、勤務の割変で夏休みにとってもらう。そういったような対応をしています。そのようなことをするのは、各学校では無理だと思います。今のこのようなシステムを作るにはどうしていくのか、予算も必要ですし、法律も必要です。

それから、学校だけが学ぶ場ではないのではないだろうか。地域の方にも、親御さんにも理解してもらいたい機会ではないのかなと思います。まして、南房総市や鴨川市などいろいろなところでいろいろな取組が始まっているので、それをベースにして、それを広げていくということも大事と考えます。

そして最後に、公教育であるということで、石井恵子先生が小湊小での実践を語ってくれたのですが、公教育の限界にチャレンジしていると思います。全員を呼んじゃうと、「ごめん、ここから上の子はごめんね」ということですが、夏休みにやったということで教師のサービスも考えなくてならない。そういうような本当に土曜スクールに近いような形の限界に近い姿を語ってくれたのかなと自分は思いました。

司会（川名）：それではここで、再びパネリストの皆様にはマイクをお返ししたいと思います。再び、パネリストからご意見を伺います。

清本：先生方の話を伺って先生方が多忙である事は理解しました。土曜日に体験学習をするというのが全体的な意見ではないかと思ったので、先生方に全てをお願いするのではなく、やっぱり私たち保護者や地域の人たちの協力を得ながら、そういう機会を子どもに与えるのがいいと思います。私事なのですが、夫が大学の教授をしております、理科の教材を小中学校に提供しております。小中学校の先生がすぐにできる理科の実験キットなども作っておりますので、そういうものを活用して頂けると良いのではないかと考えました。

永田：先生方が本当に忙しい事は、私どもも重々承知しております。私の本音を言いますね。子どもが「先生、こんなの、できないよ」と言った時に、「そうだね、できないね」と言うかということ、違いますよね、「もう一回、考えてみようよ、出来るかもしれないよ」と言いますよね。この場でも、今までの枠組みで考えると難しいとか、システム自体を考え直さないといけない

とかといった意見が多いですね。先程、土曜日に校長先生のOBの方に来ていただくことによって、土曜日の補習を確保したとか、そういった100点満点の対応ではないかも知れませんが、そういった前進していくものもあると思います。先生方が忙しい事はわかっておりますし、難しいこともわかっていますけれども、何とか工夫して時間を確保してもらえると嬉しいのです。これは願いです、「やれ」は言いません。先程の提案は素晴らしいと思います。できればそういう提案が、現場からあがってくるのが望ましいと思います。

ただ、そういったことが速やかに実行されるという仕組みを、管理職の先生方や行政の先生方をお願いしたいと思います。学習塾は民間企業ですので、スピードが大事です。ですから、私は部下から「こういうことをやってみたい、あんなことをやってみたい」ということがあったら、1週間以内に結論を出すようにしています。やっとうまくいくかどうかはわからないですけれども、とにかくやらせてみる。そうでないと現場の先生方のやる気を削いでしまうことになります。「あんなことをやってみたい、こんなことをやってみたい」と、学校の先生になりたかったのには夢があったと思います。そういったものも壊さないで欲しいと思います。ですから、そういったものを積極的に、100点満点じゃないにしても、私は10点でもいいと思っています、前進していればいいと思います。

それから、私は学校がもっと強くなってほしいと思います。学校の先生にも強くなってほしいと思いますし、学校の先生方が生徒の顔色や保護者の顔色を見過ぎていていると思います。先程、補習という話が出てきましたが、「これは必要だから絶対に出てこい」と、私はそれくらいでもいいと思います。もうちょっと保護者に対して強い先生を、私は望んでいます。小学生に物事の善悪の判断は合わないですね。それに、自主性といってもあまり分からないこともあるでしょうから、「これは大切なことだからやりなさい」と強制的にやらせてもいいと思います。

補習はいい試みだと思います。ただ、うちの学習塾で補習とかをやりますと、補習の必要ない生徒が来ることがあります。つまり、できる子が来て、「なんで来てるの？」と聞くと「勉強したいからです」と言います。本当に補習しなくてはならない子が、保護者の理解がなかなかなくて来てくれないという事態が起きています。だから、私は、強制力を「そこそこ」に持つ

て、お子さんや生徒さんに臨んでくれることを望んでいますし、強い学校が復権することを、個人的には望んでいます。

樋口：先程、先生方は月から金まで忙しいということで、土曜日を入れればゆとりが出るのではないかといい意見がありましたが、土曜日を入れれば余計に忙しくなる事は目に見えています。そこで生徒と関われば、余剰時間に行くことが少なくなるわけですから、それはよくないのではないかと思います。そういうわけで、先生方の疲れをとってほしいという視点からも、時間がないことがわかっているのですが、月曜から金曜までは頑張ってもらいたいというのが願いです。放課後の学習指導にも、時間があれば、小学校はできる範囲でやってもらえば非常に助かります。

先生方の精一杯の努力の中で、これ以上できませんということで、我々は放課後学習教室というのも平成24年から始めたわけです。多くの学校が木曜日の6時間目、研修の時間の裏でやっているわけですが、塾の講師に入っただいて、市の指導でお金を出してやっていますので、市教委も立ち会っています。ですから、是非、月曜日から金曜までは頑張ってもらいたいと思います。

西条小さんでは地域の方の協力を得た土曜授業がありました。これについては私もいい方向だと思います。学校と保護者を含めた地域との結びつきがなくてはならない時代になってきていると思います。長狭高校が今年度から、学校運営協議会すなわちコミュニティスクールという制度を導入して動いているわけです。地域の教育力を生かしながら、地域の意見を学校経営に反映させながら、地域とともに学校を作っていくというようなことが、今、動き出していますので、そういう意味でも西条小さんの取組は意義があると思います。

最後に、学力テストの結果公表と土曜日授業の2つの論議をするということから、市として、また学校として、今、学力向上に向けてどんなことをやっているのかを確認する必要があるのかと思います。館山小さんが授業研究をやっていますよと、すばらしいと思います。小湊小での取組も素晴らしいと思います。そんな中で、現場での努力、どんなことをやっているのかということのを改めて考えていただきたいと思います。

土曜日授業は反対という立場で話を進めてきましたが、もし、教師や保護者や子どもが、「土曜日授業、やりたいけど」と言ったら、どんどんやってください。

これはそれぞれが同じ方向に向かっているわけですから、無理をしないようにしてもらえれば、私たちとしても賛同し、支援をしていきたいと思えます。

石井：トップダウンではなくボトムアップで土曜日授業を復活させようよというような声が、もし90%位の学校から上がったら、それは素晴らしいことと思えます。でも、現状でもやれる事はあるのですから、少しでも前進するという永田先生の考えには大賛成です。

生涯学習課や社会教育課のような教育機関が、土曜日や日曜日に子どものためにいろいろな講座や体験教室などを開いてくれています。自分の学校のことを考えると、学校以外の機関がやってくれているという認識はありますが、やってくれてありがたいくらいに素通りしている感じがするんです。もう少し学校は歩み寄って、そういうところに子どもが参加できるように家庭によびかけたり、子どもが参加する意欲を高める仕掛けをしたりする努力をしたいですね。学力向上を考えて、塾に行かせたいというような考えがあったら、子どもは塾にも、もちろん行くと思います。そうになったら、学校は塾に任せるのではなくて、塾と連携を取るとか、子どもを取り巻くそれぞれの機関がもっとネットワークを組んで取り組むということが出来ないのかと、話を聞きながら思いました。

この場では、みんなが子どもの学力を少しでも向上させたいと考えていて、その学力の捉え方も狭いものではなく、広くとらえているとわかりました。本日この座談会に参加させていただいて、もう少し努力して、みんなで子どもを育てる方法をしっかり考えていけると、私は思うことができました。

司会（川名）：4名のパネルリストの皆様ありがとうございました。本座談会はディベートの要素を加えたと言いましても、勝敗を決めるものではなく、オープンエンドの座談会です。学力向上に向けたヒントを見つけることができましたでしょうか。多少の時間がありますので、フリーでご意見をいただきたいと思えます。

一般の方：房日新聞で一般の人の参加もできるということで、参加させてもらいました。私は一般人です。みなさんが保護者の声を恐れているのと同じで、私も「ああ、子どもが人質に取られているんだ」と保護者でいる時に悔しい思いをしたことが、実はあります。私は教師を目指した一般人で、科目は美術です。

今日の皆さんの真剣な話で、本当に教師は大変だなということが分かりました。私の友人に先生がいます

が、「人の子どもはたくさんみたけれども自分の子どもはあまり見るができなかった」と聞いて、先生は大変だなと思いました。

この地域で考えると、豊かなのは先生と市役所と銀行ぐらいですね。家庭の中にも貧困が入ってきています。多くの人たちは公の教育に子どもをあずけています。一生懸命働いて、土日も働いて、そうすると子どもを置いて働くということをしています。豊かではない地域で暮らしていると、公務員である先生たちは現実が見えていないのではないかと感じてしまいます。また、塾の話が出てきましたが、学校だけでは本当に学力がある子を伸ばしきれないのではないかと思います。親に経済力があつたり、ゆとりがあつたりすると塾に行かせ、塾には素晴らしい先生がいて、学校の先生がやらないような魅力的な授業をして、どんどん学習内容を理解して、格差社会がどんどん広まっていく。その連鎖で、教育を受けない子はいいい職につけない。地域の中では、学校って1番であつて欲しいし、学校が楽しい学校であつて欲しいし、授業が楽しい、面白いという授業で、塾が必要ないというくらいでなければ困るんです。実際、子どもが人質ですから、学校に向かつて意見は言えませんでした。（中略）

私は土曜日の授業をして欲しいと思えます。私の友達がそうであったように、自分の家庭をおろそかにするぐらい、先生は忙しい事はわかります。システムがおかしいんです。教育は待たないなので、先生方にとってのゆとり教育ではなく、土曜日授業は子どもにとって必要だと思います。私たちが習ってきた頃よりも学習内容は増えていきますし、多様化していきますし、公に教育するのに時間が足りないのならば、やっぱり時間は必要だと思います。そのために土曜日は授業があつてもいいのではないかと思います。先生方が大変になるならば、ワークシェアリングも考えればいいし、校長先生に考えてもらえばいいし、優秀な先生が出てきてくださればいいと、私は思えます。本当に先生の質が変わったと思えます。私は美術教室をやっていて、それを見に来た先生が「うちの学校でもやってくれないか」ということで、中学校で講義を持ったことがあります。ボランティアです。でもやっぱり続かないです、そういうシステムがおかしいのです。（中略）

やっぱり、子どもが「わからない」というのは学力がないということなので、先生達は反省してもらいたいと思えます。先程、塾はスピードだという話があり

ましたが、アンテナの張り方が違うんです。先生方は「忙しい、忙しい」と言ってハアハアするだけで、結局、アンテナも張らないで、子どもに指導しても、子どもが理解できないのでは、とても残念なことです。玉石混淆の先生方の世界の中で、子どもは「ハズレちゃった」と言うだけで、保護者は意見も言えないというのが現状です。豊かな地域ではないので、公の教育で東大を受けることができるような教育をして欲しいです。そのために校長先生とか教育研究所とか教育委員会とかが知恵を出し合って、なんとか地域に合ったシステムを作ってほしいと思います。今、待ったなしの世界の中で、少子化が進まないように、地域の中で子どもを育て、日本の社会に未来が期待できるような教育現場であってほしいと思います。

司会（川名）：まだまだご意見のある方がいらっしゃるかと思いますが、時間の関係から座談会を終わりにしたいと思います。

閉会の言葉（平柳）：以上をもちまして、平成24年度安房教育研究所教育座談会を閉会いたします。

